

安保フンサイへ・人間の渦巻を!!

70年

安保粉碎

ゼロ〇号

週刊フンポ

70

きみの
意志
アタマ
手と足
そして
金を
!!

週刊アンポとは何か

週刊アンポはたんなる雑誌ではない。たんなる雑誌ならこの世の中にはいくらでもある。これは武器だ。戦争に反対し、日米の軍事体制を攻撃する紙のつぶて。

活字の弾丸。

あくまでも反権力の運動の武器。

世は大量消費の時代。だが、この雑誌は、どこまでも反消費の雑誌である。資本主義の消費の仕組みにしばられているために、他誌の書けない問題を、週刊アンポは、どしどしとりあげ、たたいてゆく。戦争にたいしては徹底的であるべきだ。

買うこと、読むことで、この雑誌の目的は終らない。週刊アンポの運動にかかわり、みずから運動をかたちづくることで、書き手、読み手という型にはまった分類をうちこわしてしまおう。

行動で安保をつぶす意志のあるすべての人にこの雑誌は開放されている。

安保、沖繩、権力の腐敗について新事実を知る者はすすんで週刊アンポ社に來たれ。この雑誌をたねにして討論をすすめよ。その成果、批判を知らせよ。

週刊アンポを使って運動の渦を全国につくってゆこう。

これは0号の見本だ。一〇〇円以上のカンパで三〇〇万円が必要だ。

九月から一週おきに発行される「本番」は、本文六四頁、グラビア八頁、定価一〇〇円。

経営の破産は覚悟するところ、運動の不完全燃焼のみをおそれる。

週刊アンポに何がてるか

この0号の編集会議に参加した無着成恭は、本番が出るまで見本は何度でも版をあらためて使うのだという小田実の説明をきいて、「0号一三版というのがあるんですね」といって大笑した。そんな調子だから、九月までどんなことになるのかわからないが、いま固まりつつある企画、筆者は、次の通り。

〔連載予定〕権力とたたかうものみの鋭敏な眼と耳によってとらえられる、「ドキュメント・70」それは内閣調査室、各国大使館、CIAの内部から、警察、自衛隊、アメリカ軍基地、いや、佐藤栄作の頭の中までえぐり出そうという企画だ。松田道雄「いかに死ぬべきか」、山田宗睦「オレの敵はこいつだ」その他さまざま書き物の執筆者は、たとえば、写真、漫画、レイアウト担当者をふくめて、いいだ・もも、竹内好、大江健三郎、鶴見俊輔、野坂昭如、原卓也、前田俊彦、高橋和巳、柴田翔、埴谷雄高、堀田善衛、野間宏、小松左京、開高健、真継伸彦、無着成恭、山本義隆、秋田明大、粟津潔、安藤紀男、横尾忠則、栗原達男、中平卓馬、福島菊次郎、そして今これを読むあなた。〔コラムと運動案内〕「アンポ講座」、「沖繩特報」。反戦反権力運動のスケジュール「アンポ運動カレンダー」。全国反大学、自主講座の紹介「アンポ大学」。マスコミ、権力のウソを追求する。「それはウソだ」。また「デモで日本をまわろう」。最後に特筆したいのは、ベトナム、韓国（大村収容所、出入国管理法案ふくむ）をはじめとして、アジア各地の情勢について、毎号詳細な報告が出る。

きみになにができるか

週刊アンポは運動の武器、なんでもくりかえす。書く、読む、くばる、すべてが行動の流れになる。とにかく必要なのは「オカネ」。雑誌の資金が欲しい。一〇〇万円の人で三〇人、一〇万円の人で三〇〇人、一万人の人で三〇〇〇人、一〇〇〇〇円の人で……。

へ平運動の初期に小田実は、「何でもしてください」と叫んでいた。反戦広告も、ゼッケン運動も、こうした訴えに応えて生れた。日本中から地鳴りのように人民の雄叫びがとどろいてくるためには、何でもできることから行動するというスタイルはまだ有効だ。ゼッケンひとつつける行動がショックであるような村や町がまだ日本の大部分ではないのだろうか。

デモをする。これはキミにもボクにもできる。どんな町でも、いや村でも、三人いれば日本や、世界中に向って自分の意志をゆきわたらすことができる。組織がなければ何もできぬなどというのは迷信だ。「デモをやろう！」

自分の意見と経験を書き、壁にハリ出す。週刊アンポに送る。これはいますぐできる。週刊アンポはそのためにつくるのだ。

ハタをつくる。ハタをたててデモに参加する。すると、知らない人が集る。たくさんの人が何かやるべきだと思っているのだ。

つまり人は行動できる。そして何が生れるか？ 行動する前には何が生れるかわからない。ただ安保と沖繩とベトナムに向って一人の人間が行動すれば、かならず周囲が、自分が、変る。世界はそうして変るのだ。

姫路は自衛隊の町である。五月三日と四日、市制八〇周年祝賀行事に自衛隊が大バレードをやるという。憲法記念日に自衛隊の示威がある！それはまさに「憲法への挑戦」ではないか。

そこでバレードの隊列にむかってピラをまくことにした。

そのピラは、ザラ紙を十二等分し、抗議文やいや味を両面に印刷しそれを三〇束に分け、紙で帯封する。それに一・五センチほどすきまをあけ、セロテープをはる。そのすきまは、投げたとき破れやすくするためだ。それからその帯封に長さ一〇、二〇メートルの小包用ロープをつける。

使用時は、ヒモの一端をもち、ピラ束を目標物の頭上に強くなげつけ、のびきったところで、ヒモをグイと引くとパッと紙吹雪が散るといふ仕組みである。

いよいよ四日。本格的な機甲化部隊（砲車・特車）のバレードである。

当日はA・B・Cの三班に分けた。

A班は、バレードの三〇分前に、大横断幕（憲法記念日に挑戦する自衛隊バレードやめなさい！）をかついで、バレードコースを先行し、ピラをくばる。

その陽動作戦で右翼や私服をひきつけるわけである。
B班は、デパートの屋上から約一万枚のピラまき。

C班は、バレード閱兵台附近で、見物人にまぎれながら、すきみて隊列にピラを投げつけるといふゲリラ作戦。

バレード通過一〇分前、閱兵台付近は私服をまじえた警官で一ぱいで、もういっせいにこちらを注目している。先に来ている。

秘指令

ピラ「バクダン」を投げよう！

行進がはじまった。人垣をわけ前に入るふりをする、びったりうしろに私服がついてくる。

すかさずうしろへさがる。私服が前になる。瞬間私服の肩越しに司令の乗った特車めがけて、ヒモのないピラを三発。胴体に全部命中！パッとピラが地面に散ってゆく。

「ああっ、何をする！」私服に両手をつかまれる。物凄いいながら

幕、人ばかり。

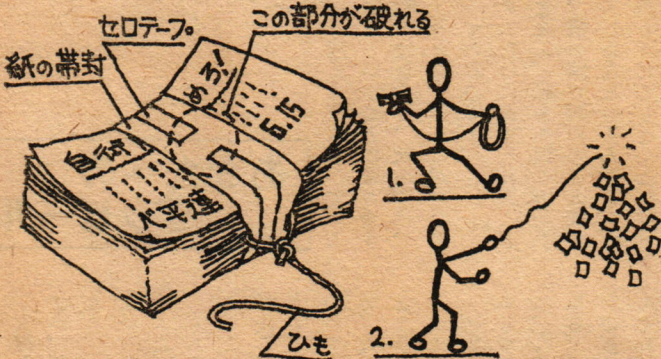
「まあ手を放しな」

「なんかわるいことしましたか？」

「あんたらぼくばかり気にとられてたらアカンで……」

彼らは、あちこちをみまわし出す。そのすきに手をふりほどき、人ごみにとびこんで逃げ、紙包みをおいたところへ。誰も追ってこない。ピラ束をとりだす。

「おちついておちついて」とい



いながらヒモをさばき、思いきって強くなげる。ピラ束は、特車上の指揮者の頭上で見事サクレッツ。パアッと紙吹雪がふりかかる。ヒモを使ったほうが数段効果的である。見物人がどよめく。台上の司令があわてている。二発・三発・全部を投げおえた瞬間、一〇人ばかりの私服にとり押さえられる。「この野郎」などという。

「こんなところでゴチャゴチャ」
「何の罪や」
すると「軽犯罪法」という。「第何条や」というと答がなし。
「もうええやろ。バレードも通過したし……」というわけで釈放。というのが一部始終。
さて、このようにしたヒモ付きピラ束を、大村収容所・米軍基地・野戦病院・自衛隊など高い堀や障害物ごしに、目標へとどけるといふ作戦はどうだろうか。

風の方向さえ見定めれば、こんどの経験からして、成功まぢがない。

この文章を読む人たちは、今すぐ、ピラをバクダンにして投げよう。ひとりひとり、また、集団で、安保に向って、安保体制にむかって、投げよう、今すぐ。

(向井孝・ベトナム反戦姫路行動)

アンポ・スローガン

安保をつぶせ

沖縄を私たちの手に

日本を私たちの手に

アンポは反安保の人間の叫び

安保——日米安全保障条約とはいったい何でしょうか。

紙に印刷された条文——それなら、お手もとの六法全書をひらかれるといい。この週刊アンポのグラビア頁にも全文がのっています。声を出して読む。五分とかりますまい。簡単です。ただその五分のあいだに、次のようなさまざまなことが、あなたの胸に浮かび上って来ているかどうか。

たとえば、大学の構内にまっさかさまに墜ちるファントム戦闘機の姿。そのとき燃え上る炎。炎は東京は新宿という盛り場「民衆の街」のどまんなかでも燃え上りました。ベトナム行のジェット機用の燃料を積んだ国鉄のタンク車が炎上したのです。その「事故」のあと、タンク車は、人々の反対の叫びをよそに、日に何度も「民衆の街」のどまんなかを通り過ぎて行きます。そんなことは、もうこの日本では日常茶飯事になっているの

アンポへ 人間の渦巻を

でしようか。

ここからベトナムへ爆撃に出かけるなら、ベトナムのほうからお返しに爆撃に来ることもできるはずですよ。こんな危険なことが行なわれていて、しかも、私たちはそれをとめることもできないでいる。

そうしたことのすべてをうしろに、安保条約——あなたが、今、五分間で読み上げた条文があるということ、あなたはそれをお知りでしょうか。

それでは、私たち日本人は、安保条約の下でアメリカの言いなりになっている被害者、ただそれだけのかわいそう人間なのでしようか。今でも、日本や沖縄からベトナムへむかって爆撃機が飛び立ち、軍艦が出航し、兵隊や弾薬を満載した輸送機や輸送船が出發していることはもう誰もが知っている事実ですが、その事実を、ベトナム人の立場になって考えるかどうか、ベトナム人のかわいそうな被害者であるどころか、自分を殺し、傷つけに来るおそろしいア

あなたへの アッピール

メリカとまったく同じ位置に立っている人間——共犯者だということになりますつまり、被害者ではなくて、私たちは、みんな、アメリカと同じように、加害者になってしまっているのです。

これはベトナムだけにかぎられたことではありません。私たちはこの条約があるかぎり、他の国の罪のない人間を押しえつけ、苦しめるといふ人間らしくない役割を背負わされてしまっています。そして、そうした役割を背負うこと、私たちは、自分自身をも非人間的にとりあつかっているのではないでしようか。安保条約は、いつのまにか、私たちの心のなかにどっしりと腰を落ちつけてしまっているのです。したがって、安保条約をなくそう、それをつぶそうとする運動は、たんに政治だけの問題ではありません。もっと大きいひろがりをもった運動で、一口に言うなら、人間をとりだす運動だと言えるでしよう。安保条約は政治的によくないばかりでなく、私たち人間に対する侮辱なのです。

では、どんふうにしてつぶすのか。安保条約とは何ですか。それは条文ですか。紙に印刷されたものにすぎないのなら、ことは簡単です。破ってしまえばよい。しかし、それで、安保条約はなくなつたことになりすか。

もちろん、なくなりはいけません。そんなことより、安保条約をつぶすためには、私たちひとりひとりの実際の行動が必要です。それしかありません。このことについては神だのみも人だのみもできない。たよることのできるのは、私たちひとりひとりが起ち上り、それぞれにかたちづくる運動だけなのです。

運動のかたちには、さまざまなものがあるでしよう。大きな組織の運動もあれば、今、生まれればかりの小さな運動もある。労働者の運動もあればサラリーマンの運動もあれば学生運動も教師の運動もあれば商店の店員の運動もあればオパチャンたちの運動もある。一口に言えばそれは安保条約をつぶし、沖縄を私たちの手にとり戻し、それによって、日本の独立をとり戻す、いや、ひよっとするともっともかんじんなことは、私たちが安保条約の下で失なつてしまつていた人間をとり戻す、とり戻すだけではなく、運動のなかで新しい人間をつくり出すことではないでしようか。そうした運動、そうした人間の動きをまとめあげて、私は「アンポ」という名前前で叫びたいと思います。安保条約が「安保」なら、それをつぶそうとするのが「アンポ」です。週

刊アンポは、そんなふうな「アンポ」のひとりひとりの行動、あるいは、そのひとりひとりの行動が大きくかたちづく運動が自由に使用する武器なのです。誰がどんなふうに使ってもかまわない。あなたがもし「アンポ」の一員なら。

アンポ・何をいまするの

目的をはっきりさせましょう。週刊アンポは雑誌ではありません。ひとりひとりが行動に踏み切り、運動をかたちづくるための道具であり、武器です。さしあたっての目的は三つあります。

安保をつぶせ。

沖繩を私たちの手に。

日本を私たちの手に。

「私たち」というのは、ほかならぬこのアツビルを書く私のことであり、それを読むあなたのことです。「私たちの手に」のあとに「返せ」とつづけて下さってもよい。それであきたらぬ人は、「奪

い返そう」と叫んでもらってもよい。いや、叫ぶことより、自分で動き出すことが、まず、かんじんです。

目的を達成するために、三つのことが必要だと考えます。

一つは、その私たちが日本中でさまざまな運動をかたちづくることです。これまでにあった運動に加わり、それを大きくひろげる。週刊アンポは、おたがいの運動のあいだの連絡機関となるでしょう。どの運動がどのように週刊アンポを「利用」してもいい。週刊アンポは「私たち」みんなの道具であり、武器です。

あるいは、週刊アンポを中心にして新しい運動をかたちづくることもできます。読者集会というかたちで日本の各地で集会とデモが起り、最後にそれは巨大な集会、デモの渦巻となる。これは新しい「人民議会」をつくり出すことでもあります。夢想ではありません。このことは、週刊アンポがこの七月二〇日を皮切りに実際に行なおうとしていること

す。(裏表紙を見て下さい)。

三つの必要なことの二つ目は、こうした渦巻のなかから、「ゼネスト」をつくり出すことです。かつて総評の幹部は、安保ではゼネストはできない、国民の支持がないから云々の発言をしたことがありました。週刊アンポはその支持をつくり出そうとします。いや労働者自身とともに、「圧力」をつくり出そうとします。「ゼネスト」への支持と圧力——週刊アンポの行動目標の一つはそれです。

三つ目は、週刊アンポは、日本中につきまこるさまざまな運動の渦巻のなかで、各種の分裂を大事のまえの小事にしたいのです。週刊アンポは「中立」をふりかざしません。はじめから、三つの目的をはっきりさせている点で、かたよっていません。(もちろん、安保をつぶさないで、おけ、という政府側もかたよっていません)。たまた相手は日本の権力であり、アメリカのそれなのです。

意志も——週刊アンポを出し、運動をかちづかって行くために、すべてのものがいらす。これは一種の賭けです。すべてをぶち込んで、すべてのことをやってみる——週刊アンポはその方針で動き出します。スポンサーはなし。この文章を書く私、この文章を読むあなた以外には、なし。お金を出して下さい。(カンパの種類は——一口百円の大口カンパ、一万円以上百万円までの中口カンパ、そして、小口カンパは百円以上いくらでもよい。目標は三千万円。アンポ社あて、同封のフリカエ用紙で送って下さい。書いて下さい。週刊アンポをつくりに参加して下さい。週刊アンポを売って下さい。そして、新しい読者とともに運動を自分の手でつくり出して下さい。お金をすべてつかい切ったとき、この週刊アンポは消え失せ、そのとき、日本中に大きな人間の渦巻がつくり出されているのです。

(小田 実)

緊急デモ

ニュース

アスパック粉砕！
大村収容所撤去！

▼ベ平連「ベトナムに平和を、市民連合」は、アスパック開催を数日後にひかえ、6月7日、「アスパック粉砕」デモを行なった。清水谷公園から、米国、

国府、韓国の大使館をへて麻布材木町に至る長いコースに、参加者は、市民、大学ベ平連など三千余り、学校帰りの高校生も目立った。

昨年の経験で、かなりの弾圧が予想されたが、それは、はやくもアメリカ大使館前で現実となった。完全武装で待機中の機動隊はいきなり学生の隊列に乱入して、防禦を固めるスクラム

からまず五名を奪い去った。次は、デモが解散地に到着した時である。とつじよ現われたのは右翼の宣伝カー。中からは機動隊と見まごうばかりの乱闘服にヘルメットの二〇名ばかりコン棒を手に集会へなだれこんできた。そこで腕に覚え？の各大学のベ平連、市民を後方へ避難させると、なおも襲いかかる右翼に応戦、なんなく撃退した

が、負傷者多数を出した。この間、警察は、右翼テロを放任したばかりか、到着した機動隊は、二名(一名未確認)の学生を逮捕したのである。

▼長崎県大村市にある大村収容所は日本の「強制収容所」として知られたところだ。韓国からの密入国者を受容して、五メートル余のぶあついコンクリートの壁のなかにとじこめる。三月三十一日のベ平連デモを皮切りに大村収容所への、撤去を要求するデモは数回行なわれたが、六月八日も学生、労働者、市民が連帯してデモをした。参加者は三〇〇名に対して機動隊員は六〇〇名。壁のまわりには鉄条網をはりめぐらして寄せつけない。数名の逮捕者を出したが、不当弾圧ぶりをまのあたりに見た大村市民の強い共感を得た。